社　会　科

小路　晃男
砂田　武嗣
中村　光男
板倉　徹

I　はじめに――本年度の研究方向

「豊かさ確かさを求める授業」は、児童自らの主体的な追求活動においてこそ可能である。（本校研究紀要３８集「全体理論編」参照）

児童が、積極的・主体的に追求活動を展開するのは、授業で教師の教えたいもの（目標やねらい）が、児童の学びたいもの（課題や問題）として成立したとき、いいかえれば、追求させたいものが追求したいものに転化したときである。この転化させていくための主要な武器が、教材であり発問である。

このような考え方から、昨年度は、研究の対象を「教材」と「発問」に限定（課題と追求を促す場の成立への教師のはたらきかけ）し、6年の事例でささやかな実践の報告をした。（前掲紀要「社会科編」参照）

この方向は、本年度も基本的には変わりがない。一言でいえば、さらに限定し、「発問」から主体的な追求活動の成立・充実に迫ったといってよい。発問を想定しながら教材を選びなおし、組み変えていくという方向である。

この方向の背後には、つぎのような問題意識がある。

価値を内包した教材でも、最終的に児童がそれに対決する発問のレベルで生きてこなければ、追求に価する教材とはいえない。逆に、発問で児童の追求意欲を高めようと心がけるなら、発問そのものをあれこれいじくるのでなく、教材研究を深めるより他にいい手はない。教材研究と児童の現状把握、この両者の接点の中から、追求活動を起こさせ、思考せざるを得ない状態に追い込んでいく発問が生まれてくる。このいずれを欠いても有効な発問は出せない、という問題意識である。

だから、この「発問」という概念の中には、言葉による問いとは限らず、ふつう「課題」や「問題」といわれる次元のものも、さらに文書、統計、映像などの「資料」も含み込んで考えている。

以上のような問題意識を基盤にして、本年度の研究課題を列記するとつぎのようである。

一つに、社会科の追求活動は少くとも単元レベル、さらにはもっと長期の連続した追求過程を高めるのであるが、そのためにもその一コマ一コマの１時間の授業の追求の姿を見直し、高めるてだてを明らかにすること。

二つには、追求過程の各段階、追求活動の各場面において、その状況にふさわしい発問の類型というものがありそうであるという問題意識からの研究である。とりわけ、解決段階でもう一歩の追求を促すための発問はどうすべきかに重点を置いた。

三つめには、発問が、その本来の任務を有効に果たすためには、発問そのものが備える条件とその発問が機能する「場づくり」の整備が必要である。研究の窓口は「発問」であるが、その究明のためには、教材、児童をはじめ授業過程の全体を見直すことになるであろう。

そして最後に、本年度はこれらの課題を低学年を中心に実践研究してみることとする。

Ⅱ　追求活動充実のために

1.　追求活動からみた発問のみなおし

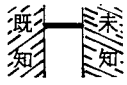
(1)　「既知と未知の間」＝追求活動充実の鍵

社会科に限らず、授業は、児童がすでに学習したものと、いまだ学習していないものとが接触するところで成立する。児童は、新しく獲得すべき一定の対象（知識・概念・社会的な見方・考え方・社会的諸能力など＝未知）に対して、すでに習得したもの（既有知識・経験＝既知）を武器として、「未知」の探究に挑み、やがて「未知」を「既知」に変えていく。この過程がすなわち授業である。

発問とは、「既知」と「未知」との矛盾・対立のなかで、「未知」の探究にむかっての指さしである。発明は、まさに「既知と未知の間」＝「半知」において生まれるのである。この間が左のA図のようにかけ離れていても、B図のように接近していても追求は成立しない。

A図

B図



「輪島塗はどのようにして作られるか」と問いかけても、あまりにも問いの範囲が広くて追求の方向もてだても見出せない。逆に、「輪島塗は何県に生産されるか」のような一問一答完結型では追求の必要性すら感じさせないのである。

だから、この両者の間をどの程度にするかが充実した追求活動を生み出す鍵なのである。そのためには、「既知」と「未知」を明確にする指導が重要である。児童の現状把握が厳密になされてこそ、それが可能なのである。

(2)　追求過程と発問の特質

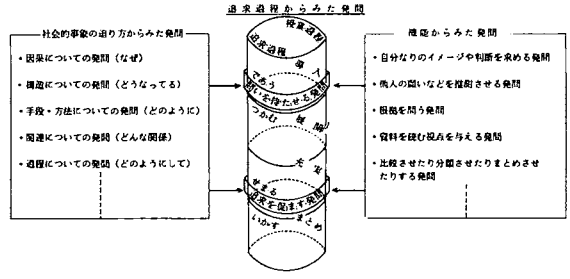
わかっているようでわからない。だから思いきって手を出してみよう。追求とは、つぎつぎとこのような「未知」状態をつくり出していくことだといってよい。そのためには、社会事象のどこに目を向けさせ、どこに探りを入れたらよいのかを意識させる。つまりその状況に適した発問が重要となる。換言すれば、追求活動の各段階、各場面において、その場にふさわしい発問がありそうであるということである。

追求過程に即してみても、事実を集める発問、興味関心を起こさせる発問、問題意識を生み出させる発問、児童の考えを深めさせる発問、児童相互が深め合い、協力しあう発問などの類型が浮び上がってくるが、これらはそれぞれの段階がねらいとしているものに適確に即応してこそ、有効な「半知」状態がつくり出せるのである。

このことは、問いかける内容についてもいえる。下の図はそのいくつかを追求過程と結んで考えたものである。（注）まず今「社会事象へ迫る発問」が良いのか、それとも「機能からみた発問」が良いのか、あるいはこれらを組み合わせた方が良いのかを考えてみなければならない。さらにこれらの中で何を問うたら最適な「半知」状態となるのかも刻々決定していかなければならないのである。

下の図でも明らかなように、追求過程で強く「半知」の状態を意識させる場（主要発問の場といってもよい）を二回考えている。

一度は、問題把握段階で、「問い」を持たせる質の発問が重要である。児童の興味や関心を引き起こし、あるいは驚きや意外性を持たせ、教



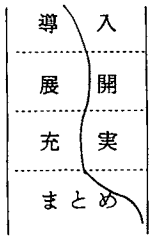
材に取り組んでいこうという気を出させる問いかけである。

今一度は、解決段階で、追求をさらに強く促す問いかけである。根拠を問いかえしたり、意見の違いを明らかにしたり、児童の常識的な解釈や浅い見方に対して、あえて対立する意見や別の視点を提出することによって、教材の中核にむけてさらに追求を促し深めさせるのである。

この二回の場に、学習活動のねらいと予測される児童の姿との関連において、前回のような発問内容と仕方が具体化されてくるのである。

(3) 「充実の場」の設定

この二回の主要発問の場を、単元レベルだけでなく、1時間の授業レベルにも設定してみた。1時間の授業過程、「導入——展開——充実——まとめ」の「充実」の場がそれである。



左の図のように「展開」段階で「わかったぞ」という意識になっているのを、新たな「未知」に遭遇させることにより、さらに深く巾のある追求をさせようというのである。「未知」を自覚させるためには、新しい事実であったり、観点であったり、友だちとのかかわりであったりする。

2. 追求活動を高める発問とその「場づくり」

「半知」の状態をつくり出すためには、それにふさわしい「発問」とその発問が響く「場づくり」が大切である。気をつけてきたことのいくつかを列記する。

(1) 「どのようになっているか」を十分に

社会的な見方・考え方を育てる社会科の授業は、ややもすると「なぜ」「どうして」「どんな」などという、社会事象間の因果や構造に直接的に迫る発問が多くなりがちである。そのためには「どのようになっているか」をまず明らかにする必要がある。事実を十分集め、事実にたっぷり浸らす中でこそ、発問が本来の追求を促す光を帯びてくるのである。既習事項や生活経験の少ない学年ほどその必要が大きい。

(2) やはり「よい教材」の選択を

詳言を要しない。「よい教材」を選ぶことである。具体性・意外性・新鮮さ・感動というように、児童の興味・関心を引き起こすような素材を教材に使って問いかけることである。そのようなものなら一つの事象、一枚の資料でも十分追求が促される。

(3) いいまわしにも工夫を

児童が追求しだすために、資料・板書・種々の学習活動などの影響も大きいが、問いかけの仕方、いいまわしの違いによっても、児童の追求意欲に差がでることも確かである。「自分だったらどうするか」という行為者として考えられる問いかけも有効である。

(4) 「書くこと」を節々に

発問に対して直観的にしろ自分の考えがノートに書けるということは、すでに「半知」の状態にあり、自分なりの追求の足場を持っているということである。「書く」という作業を追求過程の節々に取り入れることによって、自己の問題意識がいっそう鮮明となり、足場も強固になり、追求活動がさらに高まってくる。また、これが同時に児童の現状把握にも好都合である。

(5) 対立拮抗を助長させる発問を

答えが一つしかないような問いかけは、すでに発問の基本的な要件を欠いている。発問は、児童個人、および集団の内部に対立拮抗を起こすような問題性を持つことが生命である。対立拮抗による集団的な状況の中で、児童は考えざるをえないところに追い込まれていくのである。

(6) 「未知」が残る終わりかたを

授業の最後が閉ざした終わり方では、追求活動が切れてしまう。「わからなさ」を残す開かれた終わり方こそ重要である。そのためには、「充実の場」の発問と「わからなさ」を貴重なものとする学習集団の存在が不可欠であり、その確立こそが急務といえる。

（注）明治図書「社会科教育」№264 P25を参考にして作成しました。

Ⅲ 実 践 例

── 1年「がっこうのいきかえり」の実践を通して ──

1. 教材化にあたって

(1) 低学年社会科のねらいと本単元のつながり

私たちの社会生活は、その地域の大勢の人々の営みやはたらきが結びつき、つながり合うことによって成り立っている。この人々の協力やつながりの姿を児童の生活と結びつけて考えさせる。そのことによって、身近な社会生活に対する認識を深め、社会の一員としての自覚を高める。これが、低学年社会科のねらいである。

本単元「がっこうのいきかえり」では、通学路をとりあげ交通の安全を守るための施設を具体的に観察させる。道路の情況にあわせて安全のための施設が設置されていることを見つけ出させ、人々の配慮に気づかせることをねらうのである。また、交通安全推進隊など地域の大勢の人びとが、交通安全のための仕事を分担しおこなっていることを理解させることもねらいの一つである。

(2) 児童の実態

児童は、市内全域から交通事情の厳しい中心部の学校へ毎日登校して来る。通学距離も長く危険な地点も多く、交通安全については、親や教師からつねづね教えられ注意されてきている。児童も、十分とまでは言えないが自分なりに気をつけようとしている。

朝の会や日常の生活のなかにも、「道を渡っていて（体が）車とスレたよ。」「車に足を踏まれそうになったよ。」と興奮して話しかけてくる児童の姿が、ときどき見られる。

このように通学時の交通安全については、児童の日頃の生活と深く結びついており関心も高い。しかし、そこに設置されている標識や信号機など安全を守るための施設や人々の姿に対しては、意外に無関心な児童が多い。

しかし、児童の通学の安全は、まぎれもなくこれらの施設や人々のはたらきによって守られているのである。遠方から登校してくる本校児童の学校生活が成り立っているのもこれらのはたらきがあるからこそである。

ここに本校児童がこの教材を学ぶ、大きな意味があるのである。

(3) 追求の充実にむけて

① 追求する場所（道路）を限定し、その場所とのかかわりを大切にして追求することが重要である。

市内全域が校区であり通学範囲が遠大で通学の上で共通部分が少ない本校での追求にあっては、このことは特に忘れることはできない。

それは、特定の場所（道路）と結びつけないで安全を守る施設や人々のはたらきをとりあげた場合次のようなことがおこるからである。即ち、一人ひとりの児童は自分の経験に基づいて勝手に事象をとりあげるばかりであり、深め合うことはできない。追求がすれちがいかみ合わないのである。

② 見学や観察の活動をできるだけとりいれることが大切である。

社会科が社会事象を対象とする以上、児童が実際にその目で見、手でさわる活動は基本であり、追求に具体性をもたせる意味でも重要である。とりわけ1年生の児童にとっては実際に見、体験するだけでも、自分の世界が広げられ価値あるものとなる。

この①、②の視点から考え本実践では、「校門前の通り」と「広坂通り」に追求対象を限定した。そのわけは、この二つの通りをほとんどの児童が通学路として利用していること。しかも、学校に近く見学が容易であるということ。裏通りの狭い道（校門前の通り）、表通りの広い道（広坂通り）として比較、対応して認識することができ、しかも、両者を合わせて考えれば、道一般として普遍化できるからである。

③ 児童の意見の対立をてこにして、自らが問い、追求する学習が、1年生児童にとっても可能かどうか確かめたいということである。

低学年社会科は、どちらかといえば、問題と

する事象についての事実を多面的に数多く集め、それをその児童なりに表現させることが多い。そして、この活動を通して社会事象に対する認識を獲得させようとするのである。この方法による学習は、低学年児童の発達を考慮したものであり妥当なものと思う。

しかし、本実践をはじめるにあたってこの学習のしかたを土台にし、事象の見せ方と課題を工夫することによって、意見の対立をバネに自ら考え、追求する学習が1年生児童にとっても可能と考えた。事象の見せ方、課題づくりの研究を通しこれを確かめていきたい。

2. 単元計画

(1) 目標　・学校の近くの通学路を観察させ、道路の情況に応じて交通の安全を守る施設や人びとのはたらきがあることに気づかせる。

・交通安全のための施設や人々のはたらく様子を具体的に観察させ、自分なりに表現させるなかで自ら追求しようとする意欲と能力を養う。

追求過程とねらい	主な学習の流れ	時間
であう ・学校のまわりの通学路を見学し、絵地図にあらわしながら様子をつかむ	＜どの道から学校に来るのかな＞ ・バスをおりてから学校までの道順を説明する ・説明した道順を地図にあらわす ＜これは（ナゾの場所）何だろうかな＞ ・絵地図に建物の名前を記入　屋上から見学 ・ナゾの場所を見つけにくい　通学路の見学 ・見学した道筋をたしかめ合う	4
つかむ ・広坂通りや校門前の通りには、安全を守るためにどんな施設があるか調べる	＜学校に来るときあぶないめにあったことは＞ ・あぶないめにあったときの様子を話し合う ＜通学路には安全を守るための工夫はないか＞ ・広坂通りを見学し安全を守る施設を見つける 信号、横断歩道、ガードレール、標識など	2
せまる ・広坂通りや校門前の通りには、道路の情況に応じて安全を守るための施設が整えられていることをつかむ	＜広坂通りは安全な道だといえるか＞ ・広坂通りの絵地図に安全を守るための施設を書きこむ ・通りのようすと安全を守る施設のはたらきをつなげて考え、通りが安全か話し合う。 広坂通りは人や車が多く通り大変混雑しているが、安全のための施設が整えられており交通ルールを守れば安全な道だといえる。 ＜校門前の通りの絵地図をつくろう＞ ・通りの見学……通りの様子 ↓　安全を守るための施設 ・絵地図づくり 「安全のための施設は、広坂通りに比べ少ない。これで安全が守れるのだろうか」 ＜校門前の道は安全といえるか＞ ・通りの様子……人や車のとおり、道幅 ・安全のための施設……標識、歩道など 校門前の通りは、狭く安全のための施設も広坂通りに比べ少ないが、通りにみあった施設が整えられており安全な道だと言える	7
まとめ	＜ほかの道も二つの通りと同じで安全を守るために気がくばられているかな＞	2

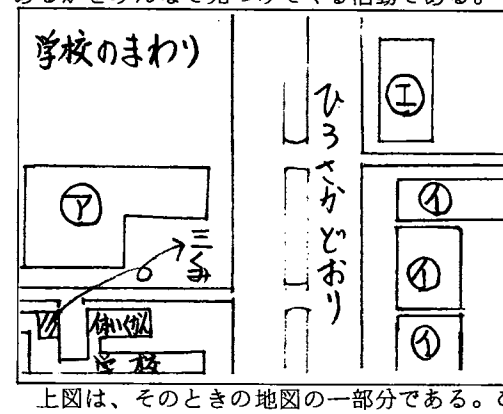
3. 指導の実際と考察

(1) 通学路の見学を意欲的におこなうために

安全を守る施設や人々は、その場所（道路）の情況に応じて設置されはたらいている。それ故、そのはたらきをつかむためには、どうしてもそれらが設置されはたらいている道路の情況を知らなければならない。そこで、まずはじめに、学校のまわりの通学路の情況をつかむことから学習は始められる。

「校門を出てから右へ帰るのか、左へ帰るのか。」に始まり、「屋上から自分の乗り降りするバス停の方を見る」をへて、さあ通学路の見学である。「学校へかよう道を見学してこよう」だけでも、もう児童は大喜びであるが、道とそのまわりの情況をつかむ見学とはなりにくい。目的を満足させる効果的な見学をするために「ナゾの場所調べ」を軸に見学をすることにした。

これは、オリエンテーリングのように教師が作成した地図をもとに、「ナゾの場所」が何であるかをみんなで見つけてくる活動である。



上図は、そのときの地図の一部分である。ここでは、㋓の郷土資料館が児童のナゾの場所として残るだろう。㋓を見つけてくることを目的に見学が始まるだろうと予測した。資料館は、昔からの建物であり、その風貌も「ナゾ」の場所にもってこいである。中に入って展示室をサッとのぞくのも楽しく有意義であろう。

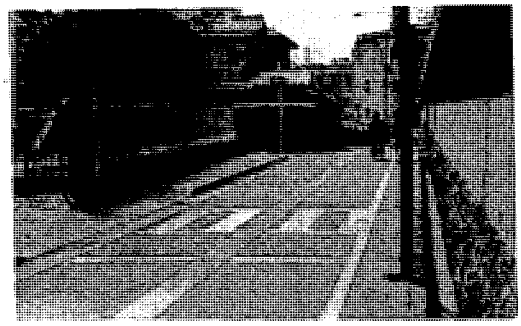
授業の実際では、思ったとおり㋓がナゾとなった。見学は、㋐、㋑が市役所、県庁か確めながら、目についた他の建物や物を地図に書き加えながら進んだ。児童は、市役所、県庁を指さし、

道の角では地図を上にしたり下にしたりして、ナゾの場所㊀をもとめて歩んだ。

教室にもどってからは、どのようにして㊀までたどりついたのかみんなで地図をなぞった。新しく見つけてきた建物や木、信号などもつけ加わって、通りの様子は大分あきらかになった。

(2) 追求に立ちむかわせる課題（発問）づくり

今までのすぐれた実践のなかには「どうして遠まわりするのだろう」という課題で追求させたものがある。真っすぐ行けば近いのに通学路が遠まわりになっているわけをさぐらせ、そのなかで安全を守るための施設をつかませたものである。このように児童を追求にかりたてる課題がなんとか生み出せないものであろうか。課題をもとめて通学路を歩いた。



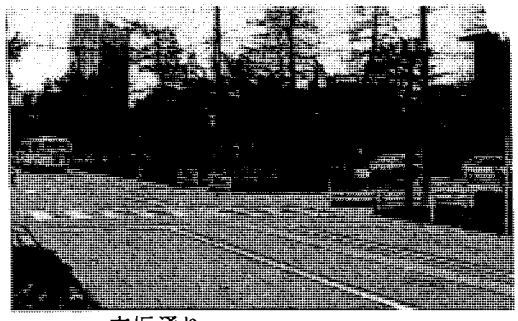
石亭前の通り

・「石亭前の通りは歩道が途中でなくなっているのはどうしてか」

・「広坂通りには横断歩道が多いが、校門前の通りには一ケ所しかないのはどうしてか」

・「校門前の横断歩道には信号がなぜないか」

など、いくつかの課題を考えた。



広坂通り

どれもこれも、すぐに答えがでてしまうものであったり、逆に児童が追求しても答えがわかりそうにないものばかりである。課題づくりは大切というが、本当に追求に足る課題づくりのなんと困難なことかと、頭をかかえこむばかりであった。

校門前の通り

自信のある課題と誇れるものでないが、次の課題で実践することにした。

・「校門前の通りは安全な道といえるか」

なんとも限定されていない乱暴な課題と思われるかもしれない。でも、私は、こう考えた。一本の課題のみで考えなくてもよいではないか。類似する課題　・「広坂通りは安全な道といえるか」（一の矢）を発し、そこでの追求の方法と結果を本課題を限定する伏線として活用しようと考えたのである。

片側に市役所を、もう一方の側に県庁、県警本部、金沢中警察署を並べ、金沢の代表的な道といえる広坂通り。その広坂通りに対して「安全な道といえるか」と問うのである。数多い横断歩道、信号機、交通標識。広い車道、歩道、中央分離帯。これらを見た児童は、「安全な道」だと言わざるをえないのではないか。つまり、安全を守る施設を指標にし、「安全な道か否か」を話し合わせるのである。これが本課題限定の伏線である。

この「広坂通り」の追求は、単に本課題の無限定性を補うばかりではない。本課題「校門前の通り」を追求するときには、一の矢と類似している故に、「広坂通り」での追求経験が水先案内（未知と既知の間）としてはたらくであろう。 そして、この「未知と既知の間」は、追求活動に不慣れ

な1年生児童にとって大きな味方となり、より多くの児童の追求をうながすはずである。

実践でたしかめることにした。「せまるの5時間目」のようすである。

児童は、見学して調べた安全を守るための施設を校門前の通りの地図にはった。意外に、交通標識が多く設置されていることに驚いた。その次の場面である。

T　広坂通りは、安全な道だと話し合いましたね。では、この校門前の通りは安全な道だといえるかな。（課題の提示）

児童は、「広坂通りは安全な道か」の学習を生かし、人通り、車の数と安全施設に注目するだろう。

安全でないと考える児童は、道幅が狭いこと。歩道も狭く人とすれちがうときは、片一方の人が、車道に出なければならないこと。横断歩道はあるが信号機はないこと。これらのことを根拠とするだろう。

安全と考える児童は、広坂通りに比べ通行人と車が少ないことを。30キロ制限の道であり、速く走れない道であることを。標識がいっぱいあることを根拠とするだろう。

挙手によって児童の考えを確かめた。

・安全と思う者……31人
・安全と思わぬ者……4人

安全と答える者が、31人もいることを知り私は驚いてしまった。私の予想と反対の結果である。安全と思わぬ児童の意見に肩入れしていかなければならない。

C1　安全といえます。標識がいっぱいあるからです。

C2　車の数しらべをして広坂通りに比べてすごく通る車の数が少ないことがわかりました。だから安全です。

C3　センターラインがあるから、車がぶつからないので安全だ。

C4　横断歩道もちゃんとある。安全だ。

C5　安全と言えません。信号がないから、今は赤か青かわからなくて交通事故をおこしてしまいそうだからです。

（C大勢　そういわれてみるとそうだな）

児童は、前の広坂通りの追求のしかたを活用し安全だと思うわけを発表したのだ。そしてC5の児童は、同じく前の追求のしかたを活用して、信号機が設置されていないことから、本時の自分達の追求問題をさぐりあてたのだ。

T　信号がないから安全でないね。

C6　車が通らないときは、いいじゃないか。

C5　いつも通らないとはかぎりません。

C7　信号がなくてもかわりのものがあります。

T　ええっ。信号のかわりになるものがあるの？

C7　横断歩道に黄色の旗があります。それをもって渡ると車がとまります。

（C　ええっ、そうかな？なるほどとつぶやきが多い。）

C8　横断歩道の上には、大きな標識があって、遠くからでも車の人は横断歩道があることがわかります。信号のかわりになっている。

（C　なるほど信号のかわりだぞという声多し）

児童の追求によって、黄色の旗や標識の役割が安全に道を渡るという場面とからめてとらえなおされたのである。

4.　実践のふり返り

1年生児童にとって、意見の対立をてこに自らが問い、追求する学習は可能かどうか確かめてきた。事象の見せ方を工夫し、なげかける課題を研究してきたのである。

いま述べた「校門前の道は安全か」の中では児童は、まことに、わずかな時間の中ではあるが、やりとげた。「安全である。」「いや、そうではない。」という意見のちがいが、追求においこみ、前時や他の意見とつなげて思考させ、問題を見つけ、解決へと進めた。しかし、このことをもって、できたとは決していえない。児童の発言内容をみると、その概念性が見えるからである。この概念性を見ながら、それを打ち破り、具体にひきおろした追求を児童に要求することができなかった。児童の実態に適した「きりかえし」の発問がわからなかったからである。

―― 3年「わたしたちのくらしとたて町商店がい」の実践を通して ――

1. 教材化にあたって

(1) 本単元のあらましととらえ方

地域の消費生活は、商店街の働きによって成り立っている。しかし、そこに集まる人々の多くは、必ずしも消費物資を得るためだけに足を運んでいない。楽しみに来たり、ウインドーショッピングの人々も多いのである。つまり、買い物というよりは、散歩道・公園・消費情報を得るといった目的で商店街を利用しているのである。

ここでの学習の視点の一つは、人々が生活していくための基本的要件である大量消費物資の供給の働きをしているのは商店街であることをとらえさせることである。さらに、商店街を散歩道・公園化にといった将来計画により、消費者の願いに答え、愛され魅力ある商店街を目指そうとする商店街の人々の努力や工夫に気づかせることである。

しかし、売る活動には、よりたくさん売ってもうけたいという一軒一軒の競争がある一方で、競争していた店どおしが協力しているという矛盾が浮かび上がってくる。この側面には、強い資本力を持つ大型スーパーやデパートとの対抗が考えられる。

この点で、狭いながらも土地条件を精一杯生かし、売る活動を工夫し努力しており、また、地域と地域の結節点としての役割を担っているたて町商店街を素材として取り上げた。しかし、精一杯の努力にもかかわらず、たて町商店街では客足は思うように伸びていない現状がある。

こういった問題点をはらみながらも、対抗の中で必死に生き延びようと苦悩し、努力しているたて町商店街の人々の生きざまに触れさせていくことは、今後の学習をより共感を持って進めていけるものと考えた。

(2) 児童のとらえ方

児童は、一学期小単元『市ぜんたいのようす』の「片町・こうりんぼうふきん」の学習において、「市のいろいろな所から、片町・こうりんぼう近辺に人々は集まって来る。その人たちは、仕事や学校や買い物をするために集まっているのだ。」ということを学習している。また、学習後のノートの中で、「店が集まっていたら、買い物もしやすいしべんりだ。」「かた町やたて町には、お店がいっぱいあって、いろいろな物が買える。」「洋服を買ってもらったり、食事をしたり、店にはすばらしいものを売っている。」「食べる所や服屋さんやおもちゃ屋さんがあって楽しい所だ。」といった商店街の働きに関わる点を書き綴っている。

その反面、「かた町ふきんは、バスや車や人が多すぎてうるさい。」「店がぎっしり集まっているけど、何のために集まっているのだろう。」「店と店の間の道は狭いな。」といった問題点や疑問を指摘する児童もあった。

これらの商店街に対する印象や問題点の指摘は、今後の学習に生き続けていくものと考えられる。

しかし、商店街の働き、またその中に存在するアーケード、看板、駐車場の役割や歩行者天国の持つ意味についての認識は非常に浅い。さらに、買い物に集まって来る人々の願いや商店街の人々の願いや工夫、努力といった段階に到っては、なおのことである。社会的事象が持つ意味やつながりを考えるという意識は、甚だ弱く、一つ一つの知識も断片的なのである。

そこで、社会的事象が持つ意味やつながりをより明確にさせるためにも、見学、聞き取り等や、それによって脹らんで来た興味や驚き、疑問を大切にしていきたい。また、意識へのゆさぶりの場や立ち止まりの場を設定することにより、追求に連続性を持たせ、追求の深まりを期待したい。

(3) 追求活動の充実へむけて

教材研究と児童の現状把握、この両者の接点の中から追求をよび起こさせ、思考せざるを得ない状態に追い込んでいく発問が生まれてくる。このことは、一時限のみならず、単元全体を通

しても関連してくる。

まず、授業の切り込みとして、各家庭における一週間の買い物調べの事実を提示してみたい。この資料から児童は、食べ物など毎日必要な物は近くのスーパーや店で買うことが多く、洋服やくつなどは遠くの店で買うことが多いという傾向をつかむと思われる。そこで、「どうして遠くの店で食べ物を買わないのか。」と投げかけることにより、近くのスーパーや店の役割に気づかせていきたい。また一方、「洋服やくつを遠くの店まで足を延ばして買い求めている。」点について問うことにより、かた町・たて町商店街やデパートが自分たちに果たしている役割に気づかせるとともに、その確かめとしてたて町商店街での見学活動を取り入れてみたい。

見学活動により、児童は確かめる活動ばかりでなく、たて町商店街に内在するさまざまな事象や情報を見つけ出してくるであろう。また、驚きや疑問も吹き出してくると思われる。この驚きや疑問こそ、以後の学習の連続の原動力となるのである。

このように、問題を把握する段階では、児童に興味・関心を持たせ、さらに共通意識へと高めていく発問（資料）を工夫してみたい。

たて町商店街での見学活動により、児童は、。洋服店が一番多い。専門店が並んでいる。よい品物がある。パーゲンをしている等の事実を見つけ出してくると思われる。これらの調べで得た事象や情報を共同で磨き合い、思考を深めていく契機となる発問として、「よい品物があるのに、どうして安売りするのか。」と投げかけてみたい。この発問により児童は、少しでも多くのお客さんに来てもらいもうけたいという思いを出すであろう。そこで、たて町商店街の中には、同じ紳士服の店が四軒あるのだという事実を提示することにより、一軒一軒の店どおしの競争があることに気づかせていきたい。

しかし、ここで留意しておきたいこととして、素材に見通しがあるかどうかという点が挙げられる。児童が追求していくための足場となる既知の要素が含まれていない発問や資料であっては、以後の追求の連続は望めない。どの段階においても、既知と未知の要素を十分に吟味し、投げかけていきたいものである。また、未知を予想しても、その裏付けとなる資料も用意されなければならない。

これらのことは、個々の立場や思いがぶつかり合う場や、話し合いを焦点化し、深める場を組織していくことにもつながると思われる。しいては、追求活動の充実をも期待できるものと考えた。

このように、教材と児童が切り結ぶ接点の中で発問を考慮しながら、本単元を展開してみた。

2. 指導計画

(1) 目　標　・市の商店街は、私たちの消費生活を支えていることに気づかせるとともに、消費者の願いを人々の利用の様子や協力して新しい問題に取り組む商店街のおじさんたちの工夫や努力から理解させる。

・商店街での見学観察活動や聞き取り調査などによって得た事象や情報をもとに作成した資料を効果的に利用することにより、社会的事象の意味やつながりを考える力や態度を育てる。

(2) 追求過程　（総時数18時限）

題目（時）	主な学習の流れ	資料
近所の店の役割（2）	<自分たちの家の買い物は　どこの店でどんな品物を買っているか> ・食べ物、洗剤など　・くつ、洋服など 近所のスーパー、店・大きなスーパー・片町、たて町、デパート 食料品などは近くの店で買い　洋服やくつなどは遠くの片町・たて町やデパートで買う　大きなスーパーで買う人も多い	・各家庭での買い物調べ
	<毎日のように買っている食べ物は　どうして遠い店へ買いに行かないのか> ・時間がかかる　・バス代などのお金がかかる　・にもつがたいへん 食べ物などのすぐに必要な物は　近所の店で買うのが便利だ	・児童の生活経験（買い物の経験）
わたしたちのねがい（6）	<遠くの片町・たて町やデパートまで　わざわざ買い物に行くのは何かわけがあるのか> ・よい品物が多い　・安く買える　・サービスがよい わざわざ片町やたて町へ買いに来るのは　品物や店にわけがありそうだ　調べてこよう	・各家庭での買い物意識調査
	たて町商店街での見学 見学のまとめ　地図、絵作成	・見学カード
	<わざわざ買い物に行きたくなるようなひみつがあったかな> ・よい品物多い　・安売り　・多くの店（洋服店多い）・音楽…… わざわざたて町商店街に行きたくなるようなひみつがいっぱいあった	・たて町商店街地図

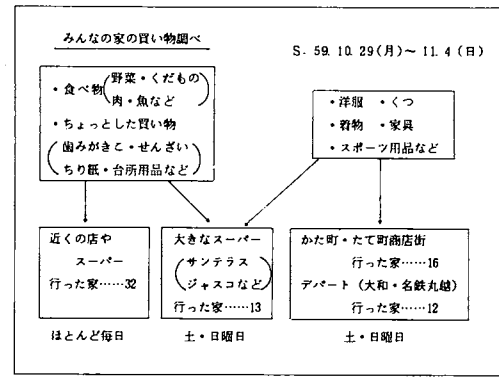
商店街のおじさんたちのねがいとくふう（8）	<よい品物があるのに　どうして安売りするのか> ・多くのお客さんに来てもらいたい　・ほかの紳士服の店より　たくさん売ってもうけたい 洋服店では　ほかの紳士服にまけないように　いろいろな工夫をしてお客さんに来てもらい　もうけようとしているようだ	・バーゲンの写真 ・たて町商店街地図
	<洋服店では　ほかの洋服店にまけないようにいろいろな工夫をしているか> 洋服店での聞き取り　聞き取り調査のまとめ 洋服店では　ほかの洋服店にまけないように　いろいろな工夫をして　お客さんに来てもらい　もうけようといっしょうけんめいがんばっていた	・聞き取りカード
	<一けん一けんの店だけでなく　商店街全体で協力・工夫しているのはどうしてか> ・どの店にもお客さんはふえる　・どの店も品物が売れてもうかる ・大型スーパーやほかの商店街にお客さんをとられないようがんばっているんだ 一けん一けんの店だけでなく　商店街全体でいっしょに工夫しながら　もうけようとがんばっているようだ	・新聞資料（500ｍ大バーゲン） ・写真 ・OHPシート
	<商店街のおじさんたちは　みんなの考えたように工夫してがんばっているか> たて町商店街振興組合での聞き取り たて町商店街全体でいっしょに工夫してもうけようとがんばっていた	・聞き取りカード
	<たて町商店街のおじさんたちが　いろいろな工夫や努力をしているのに　大きなスーパーへたくさんの人が買い物に行くのはどうしてか> ・いろいろな品物がそろっていて一度に買える　・ねだんが安い　・大きな駐車場があるからだ　・買った物をすぐのせて帰れる 大きなスーパーのほうが買い物をするには便利なようだ　このままだと　たて町商店街のお客さんはどんどんへっていくぞ	・たて町商店街へ来る客数の推移グラフ ・写真
	<たて町商店街では　お客さんを大きなスーパーなどにとられないために　どのようにしているか> ・駐車場をもっと広くする　・スーパーにまけないようなビルをたてる ・道をひろげる　・未来の計画をたてている。 ・買い物公園の計画をたてているぞ これからもたくさんのお客さんに来てもらい　いつも話し合いみんなに喜んでもらえる　魅力ある商店街にしていこうと努力し必死にがんばっているんだ	・写真 ・たて町商店街振興組合のおじさんの声（テープ） ・未来計画地図
まとめ（2）	<わたしたちのくらしとたて町商店街の勉強をふりかえり　わかったことや思ったことを　絵や文にまとめよう> ・ぼくや私の考えた未来のたて町商店街 ・新聞づくり ・パンフレット作り	

3. 指導の実際と考察

(1) 問題を把握する段階では

先にも述べたように、児童に興味・関心を持たせ、学習意欲を起こさせるべく発問が用意されているかどうかが問題となる。

学習のスタートとして、第２学年で学習している各家庭における一週間の買い物調べをあえて取り上げた。それに加え、それぞれの品物をどの方面へ買いに行っているかということも調べていくことにした。その結果、次のような傾向がつかめた。



でき上がった表を見て、児童は、「食べ物は、近くのスーパーで買っている。」「洋服やくつは、遠くのかた町やたて町商店街、デパートで買ってるぞ。」「大きなスーパーでは、両方とも買ってるな。」とそれぞれの思いを出し始めた。

そこで、「毎日のように買っている食べ物は、どうして遠い店へ買いにいかないのか。」と投げかけてみた。この発問は、児童の身近に存在するスーパーマーケットや商店の役割に気づかせるとともに、遠くの店やデパートの役割を考える足場にしたいという意図が含まれている。

この発問に対して、児童は、

C1　いつも遠い所へ買いに行ってると、とても時間がかかるし、めんどくさい。それに家の人も心配すると思います。

C2　食料品はいつもいるし、いつも買うんだから、もし夕はんの用意だとしたら、夕はんが夜中になってしまいます。

C3　それに、平生は、お父さんがいなくて車がないし、バスで買い物に遠くへ出かけているとバス代がたくさんかかります。

C4　帰る時も、にもつがいっぱいになってたいへんだから近くの店で買うのだと思います。

このように、買い物調べという一つの資料と投げかけた発問により、児童は自分たちの近くにあるスーパーマーケットや商店の役割に気づいていったのである。児童のこれまでの生活経験（既知）をもとに話し合ったのであるが、今まで、ただ漠然と見ていた近くの商店の役割(未知）について見直してみることとなった。

この後、児童は「今度は、遠くのかた町やた

て町、デパートへ洋服やくつを買いに行くわけも考えてみたい。」と言い始めたのであるが、今後の商店街の働きを追求していくための窓口を与えてくれたようである。この課題に対して児童は、よい品物がたくさんあるから・安く買えるから等の思いを出してきた。そこで家の人の買い物意識の資料で児童の思いを確かめてみた。

しかし、児童にとっては、自分の目で見て、足でかせいで確かめたものでなければ納得できないものである。中学年の児童にとって、見学活動は疑問点を確認する意味においても、また新たな疑問点を生み出す意味においても効果的な活動である。そして、素材をたて町商店街に限定し、視点を明確にして見学活動に入ったわけである。

見学により、児童は驚くばかりの行動力と観察力を発揮して数多くの事象を見つけ出していったが、その中でも、①洋服店が一番多い。②専門店が並んでいる。③よい品物がたくさんある。④安売りやバーゲンをしていた。という4点が多数の児童のノートに見られた。

一方、「よい品物がおいてあるのにどうして安売りまでするのか。」「同じ物を売っている店がたくさんあるけどもうかるのかな。」といった思いも多数の児童のノートに書かれていた。

この時点で、たて町商店街に対する共通意識と内在する問題点が児童の共通課題として形作られたのである。

(2) 問題を究明する段階では

この段階においては、調べて事象（情報）を共同で磨き合い、思考を深めていく契機となる発問が要求される。

児童は見学により、「よい品物がたくさんおいてあった。」「バーゲンをしていた。」といった共通意識に立っている。ここで、紳士服の店だけでも四軒あるという事実を提示し、「Aの店について心配なことはないか。」と投げかけてみた。これに対し児童は、

C1 今は、Aの店にお客さんが来ているけど、ほかの紳士服の店もよい品物をおいて安売りしているので、Aの店にお客さんが来なくなるみたいです。

C2 Aの店は、もっと工夫しないと、お客さんをとられて、もうからなくなるみたいだ。

という思いを出してきた。

そこで、さっそく各班ごとに、A店、B店、C店、D店のお客さん集め競争となった。やや低学年向きの活動かと思われるが、自分が店主さんなんだといった商店街をより身近なものとして意識するために効果的であったようである。児童のアイディアは多種多様であったが、次時のA店での聞き取りによって、一軒一軒の店では、一生懸命工夫して、お客さんに来てもらい、もうけようとしていることが明らかとなった。この段階で児童がつかんだ一軒一軒の工夫や努力は、次時の学習にも生かされていく。

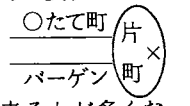
次時において、500 m大バーゲンの事実を提示し、「一軒一軒の店でも安売りできるのに、みんなといっしょにやるとよいことがあるのか。」と問いかけてみた。

C1 一つ一つのお店には、よい品物があるし、それに安売りをするからよいことがあります。

C2 お客さんがいろんな店の安い物を買ってお客さんは得をします。

T お客さんがたくさん集まってきて、たくさん買ってくれるし、お店はもうかるんだね。

C3 たて町が安売りして、かた町が安売りしていないとすると、たて町の方が安くていっぱい買った方が得だから、たて町の方へ来る人が多くなって、たて町通りの方がもうかっていいと思います。



C4 一つの店だけでなく、たて町全部の店がもうかっていくと思います。

この後、大型スーパーに8万人の客がつめかけた事実を提示することにより、協力している側面には、大型スーパーとの対抗があるという事実に気づいていったのである。このように、徐々ではあるが、一つ一つの発問によって、児童は思考を深め、練り上げていった。

ただ、ここで第3学年の思考段階やレベルを考慮してみると、これらの発問は難解なものではなかったかと思われる。一試作として、まず大きな競争相手である大型スーパーの事実に気づかせる。それに対して一軒一軒の店では対等にやっていけない。では、どの店でも潤うためにはどうするかというふうに、発達段階を考慮した発問、資料の提示が必要であったように思われる。

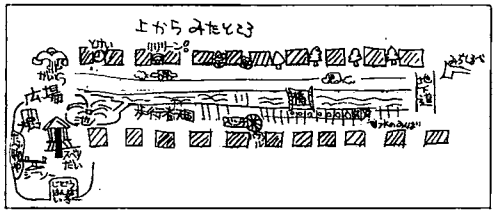
大型スーパーとの対抗に気づいた児童は、この後、対抗の中で将来計画などにより必死に生き延びようと苦悩し努力する商店街の人々の生き様に触れ、共感していったようである。

4. 実践のふりかえり

単元終了後のノートでY子は次のように述べている。「たて町の将来は、すごいものです。ベンチをふやし、道に模様を入れ、モーターで本物のように動く川をつくり、緑も多くし、その他にもいろいろな物を作り、今までの工夫といっしょにして楽しみながら買い物ができるようになるからです。私たちが5年生になったらできあがる。5年生になるのが楽しみです。未来のたて町には、何万人、何十万人のお客さんが来そうです。」

さらに、Y子は、次のようなイラストも描いている。

わ た し の 未 来 計 画



このノートやイラストから、Y子が商店街の人々の生き様に触れ、共感していったことが読み取れる。他の児童にもY子のような思いが見られたことから、各段階における発問のあり方は追求活動の充実に不可欠の要素であったといえる。しかし、発問の質や投げかけるタイミング、さらに、教材や問いの限定の甘さなど反省点も数多く残り、今後の課題としていきたい。

Ⅳ おわりに —— 研究のまとめと課題

私たちは、この一年間、発問を中心にして、主体的な追求活動の実現に迫ろうとしてきた。その中でつかんできたことの一端と今後の課題について述べてみたい。

私たちは、発問は「既知」と「未知」の適切な間の中で発するのがよいと考えてきた。適切な間を知るためにも教師は、児童の「既知」の状態をしっかり把握しておかねばならない。また、児童が追求する「未知」が、その「既知」を生かして追求できるものであるか吟味しておくことも必要である。そのことが私たちのつかんだ第一のことである。そこで、今後の私たちにとって児童の追求を捉える鋭い目と、執拗な教材への問いかけが課題といえる。

追求過程から発問を見直したとき、主要な発問の場面が二つあり、一つは、であう段階での児童の興味・関心を呼び起こす発問で、今一つは、せまる段階での教材の本質へ追求を深める発問である。この二つの発問の適否が、以後の追求活動の充実の決め手になるということが二つ目のことである。ここでも、児童を捉える目と教材研究が重要な課題といえる。

三つ目に、教師の発問が児童の追求を促すためには、いくつかの条件に留意する必要があるということがあげられる。先ず多くの体験や見学をさせ、事実にどっぷりひたらせたあとの発問が効果的であること。次に、意外性や感動を生み出すよい教材を使って問いかけることによって、興味・関心を引き出すことができること。さらに、山や海の名を求めたり、答えが一つしか出てこない発問では追求を促すことにはならない。対立拮抗を助長させる発問が大切であるなどである。

本年度の研究によって、追求過程と発問の類型化などとともに、改めて教材の質や価値について検討を加える必要性を感じた。そのためにもねらいを明確化し、ねらいに適した教材を選択する目を養うことも大きな課題といえる。